



Title	江戸時代にみる花結びの伝承：ジェンダーの視点から
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 49-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93425
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

江戸時代にみる花結びの伝承

ジェンダーの視点から

矢 島 由 佳

キーワード

花結び, 伝統工芸史, 文化伝承

Hanamusubi, Traditional Craft History, Cultural Dissemination

はじめに

1. 花結びの定義および先行研究
2. 識者がみた花結び
3. 女性が身につけた花結び
4. 男性が身につけた花結び

おわりに

はじめに

主に草花をあしらった紐結びは、長緒結びや花結びと称され、日本の「伝統文化」の一つとして認識されている。今日、香道志野流には志野袋（図1）として花結びが伝わるが、管見の及ぶ限りでは、三千家の茶道の点前においては用いられていない。花結びは人々に流布してきたが、その文化の伝承過程は明らかにされていない。図絵としての花結びの記録は、江戸時代中期以降にのみ確認でき、その多くは、茶道および香道で用いられたものである。また、花結び



図1 「12ヶ月の志野袋」

の伝承に関する史料は限られているが、時代が下るにつれ、花結びの種類は増え、大衆化していった。明治時代から昭和時代にかけて学校教育で花結びが教えられ、現代では、女性が趣味として、カルチャーセンター等で花結びを楽しんでいる。実に、花結びの伝承に女性も寄与してきたが、ジェンダーに焦点を当てた当該研究は十分になされておらず、それを明らかにすることは、従来の伝統工芸史研究で看過されることが多いジェンダーの視点を再考する契機を提示することになり得るといえ、そこに本研究の意義があると考え¹。それゆえ、本研究は、江戸時代に花結びがどのように伝承され、その文化が醸成されたのかをジェンダーの視点に注目して史料考察を行い、明らかにすることを目指す。なお、江戸時代に限定して

本稿は、第249回意匠学会研究例会（2022年11月12日オンライン）での発表に基づく

論じる理由は、明治時代に学校教育を通して知識が伝えられるようになり、花結びの伝承も学校教育を通じてなされたが、そこには国家権力の関与があり、花結びの伝承を論じる前提条件が江戸時代と異なるため、両時代を分けて論じる必要があるためである。

1. 花結びの定義および先行研究

最初に紐でできた花結びの定義と先行研究を確認する。花結について『日本国語大辞典』は、「花形に結んだ紐結びの総称。三つ輪結び、梅結び、菊結び、玉房結びなどがある。これらは装飾として単独にも使われたが、また被布などの入紐としても使われた。また、細い紐を種々の花形に結ぶ女子の遊び。女子の諸芸の一つとされた」と定義する²。一方、花結びと題して出版された書籍には、花のみならず、蝶、とんぼ、鶴、亀、兎、葵、かたばみ、笹等も含む結びが記されている³。伊勢貞丈（1718-1784）が著した有職故実『貞丈雑記』（天明4;1784頃成立、天保14;1843刊行）には、「女の芸の内に『絵かき・花むすび』と云う事あり。古き草紙物語などに見えたり。絵書きは、絵をかく事なり。花結びとは、物の緒をあげまき・あわび結びその外、色々、様々、花やかなる結びかたを習い覚えたるをいうなり。これも一つの芸なり」とある⁴。そこでは、花の形状の結びのみならず、総角結びや淡路結びも含めた花やかな結びを花結びとする。後述の伊勢貞丈の別著『包結記』も花結びに言及するが、梅、桔梗、桜、かたばみ、菊等の植物の形をした結びを蝶や蜻蛉などの昆虫の形をした結びと併せて、長緒結びという範疇で紹介する。

花結びに関連する先行研究については、額田巖（1911-1993）および藤原覚一（1895-没年未詳）による結びの研究があり、そこに花結びに関する記述も含まれる。両名が膨大な数の結び方を分類し、結びについて大胆かつ包括的な歴史観を提示し、学問分野に位置付けた貢献は大きい。額田は『結び』（1974）で花結びを装飾結びとして、その種類は100種類に及ぶ可能性もあるという。さらに、足利義政の時代に、香道の祖、志野宗信が花結びの種類の再検討を行い、新たな花結びも考案し、それ以降、花結びが婦女子のみならず、茶人や香人も知る必要があったとも述べる⁵。藤原も『図説日本の結び』（1974）において花結びを装飾結びと位置づけ、結絵図や写真を入れて技法に関する解説に力点を置くが、典拠を欠くものもある⁶。同書で花結びの系譜については、『貞丈雑記』に花結びが女子の手芸として記されていたと紹介するに留まる⁷。次に、花結びに焦点を絞った先行研究として、おほつき四郎の『伝承・花結び』（1981）がある。同書は、大枝流芳の『雅遊漫録』（宝暦13;1763刊行）、雄川丘甫の『玉のあそび』（寛政13;1801）、伊勢貞丈の『包結図説』（天保11;1840刊行）、斎藤円の『女子教科包結之栞』（明治33;1900）、木内菊次郎の『実用はなむすび』（明治42;1909）、花月庵鶴友の『小笠原流包結のしるべ』（昭和6;1931）を再編集した内容である⁸。そこには、

50 種類以上の紐および水引を用いた結び方の手順，解説，出典が図絵とともに記されるが，それぞれの著書が著された背景についての言及はほとんど見られない。

以上の辞書や史料にみる内容，先行研究を踏まえて，本稿における花結びを定義すれば，花の形状の結びのみを花結びと定義せず，総角結びや淡路結びも含めた装飾結びを含んだ紐結びを花結びとし，花結びという言葉の花は植物の花のみならず，花やかな情感を想起するモチーフを指す言葉と解釈して本論を進める。また，花結びの別称で長緒結び，紐結と称されることもあり，同慣例にもとづいて本論を進めることとする。なお，先行研究にある斎藤円の『女子教科包結之栞』（明治 33;1900），木内菊次郎の『実用はなむすび』（明治 42;1909），花月庵鶴友の『小笠原流包結のしるべ』（昭和 6;1931）に関する内容は，明治時代以降の花結びに関する内容であるため，以下の本稿での論において考察対象としない。

2. 識者がみた花結び

花結びの伝承を考察するにあたり，最初に江戸時代の識者が花結びをどのように理解していたのか概観しておきたい。具体的には，結びや折形を論じる際に言及される前述の武家故実家の伊勢貞丈が著した『包結記』で，後に白黒の版本として出版された『包結図説』（天保 11;1840 刊行）において，花結びについて記されている内容を確認する。同書は，「包記」（成立年宝暦 14;1764）と「結記」（成立年未詳）の二部構成で，「包記」では進物を包む作法を「結記」では主に装飾的な結び方を図絵と説明文を併せて解説する⁹。貞丈は『包結記』を著した動機について，別著『貞丈雑記』の奥書で「この雑記は，我が子孫家伝の古書を見る便にもなれかし，又人に故実問われたらん時に返答のたすけにもなれかしと，書きあつめ置くなり」と述べている¹⁰。同様の動機で『包結記』が記されたならば，大衆向けではなく，礼法の専門家として子孫が活躍し続けるために，伊勢家に伝わる足利將軍の御代，室町時代から用いてきた礼法を書き残したと考えられる。なお，本研究は花結びに関する研究であるため，「結記」を考察対象とする。同書の冒頭で花結びについて次のように記されている。

およそ紐をむすぶ事　さま／＼あり　今其しな／＼を　あつめて　此書にしるすなり　此
なかに　用にたつ　結もあり　用にもたゝぬ結もあり　用にもたゝぬ結も　むかしより
ありて　ふるき物がたりなどにも　女子のてずきみを　ゑがき　花むすびとなぞらへい
ふは此事なり　用にたゝぬ結なりとて　すつべからず　事にふれ　物によりて　用ふる
事有べし　かかる事を　知るはかたく　すつるは安し　あさき事なりとて　かろんずる
事なかれ¹¹

その大意は、「紐結びには色々な種類がある。今、その品々を集めて本書に記す。その中には、役に立つ結びもあれば、役に立たない結びもある。役に立たない結びは昔からあり、古い物語にも女子のてずさみとして花結びを結んだ様子が記される。役に立たない結びといっても軽んじて捨て去るべきではない。何かの役に立つことはあるであろう。この様な結びを知ることは難しく、捨て去ることは容易である。一見浅はかなことに思えるかもしれないが、役に立たない結びを軽んずるべきではない」と解釈できる。つまり、花結びは、何かの役にたつかもしれないという消極的動機に基づいて記録に残されたことがわかる。この「古い物語にも女子のてずさみ…」という箇所は、後述の『源平盛衰記』を意味すると推察でき、花結びが平安時代の女性の教養であったと認識されていたことが窺える。

「結記」の内容については、75種の結びの項目を挙げ、内65種は図解を用いた説明がなされる。結ぶ対象物は多岐にわたり、手箱、文箱、軸物、貝桶、行器（食物入）、長刀鞘袋、傘袋、烏帽子、衣服、茶碗袋、食籠袋、琴袋、笙の袋等に及ぶ。その中で、花結びは、長緒結びとして、12種類記されている。花を形どった結びは、梅結、桜結、きちこう（桔梗）結、かたばみ結、菊結の5種類、昆虫を象った結びは、とんぼう結と蝶結の2種類、その他の結び5種類が記されている。長緒結びの用途は「長緒は食籠のあみ 茶わんなどの袋 香炉木の袋 沈香箱 十種香 箱の袋 其外 何にても 袋あみなどの類 長き緒有は 皆長緒のむすび様 同じ事也 何袋は何結と定たる事なし」¹²と記され、茶道、香道に限らず、様々な用途で用いられ、袋の種類によって特定の結びが定められていなかったことが窺える。長緒結びの由緒については「伊勢家の流儀でもなく、他家に伝わる流儀でもなく、昔からこのような結びは世間の人たちの手ずさみであり、このようなことも知らないのは口惜しいことである」という旨を述べる¹³。この「手ずさみ」の意は、前述の「女子の手ずさみ」とは異なり、人々が日常的に営んできた行為を指し、ありふれた知識として理解されていたことがわかる。

以上のことから、伊勢貞丈は、花結びを平安時代の女性の教養として捉えていたほか、結ぶ対象物の違いによる長緒結びに関する細かな規定はなく、長緒結びについての知識は秘蔵する様な知識ではなく、一般的な知識だったという見解をもっていたと指摘できる。

3. 女性が身につけた花結び

それでは、伊勢貞丈が述べる「古き物語にみる花結び」とはどのようなものであったのだろうか。花結びが平安時代の上流階級の女性たちの教養の一つであったことは、『源平盛衰記』（作者、成立年代未詳）に記された女性たちに関する記述から読みとれる。『源平盛衰記』巻二の「清盛息女事」の項では、平清盛の六女について、「歌よみ連歌し、絵書花結あくまで、御心情御座す人也」とある。八女についても「大納言有房卿の北の方、絵書き花結し諸道に

達し給はり」とある¹⁴。その内容から、平清盛の娘たちが連歌、絵をかくこと、花結びを行っていたことが読み取れる。同様に、『源平盛衰記』巻三十九では、「この女房と申すは故小納言入道信西の孫桜町中納言成範卿の娘中納言局とぞ申しなる。今年は二十一にぞ成り給ふ。琴、琵琶の上手にて絵書、花結、歌よみ手いつくしく書き給ひける」とある¹⁵。その内容から、平安時代の上流階級の女性が琴や琵琶をひくこと、絵をかくこと、花結び、歌よみ等を教養として身につけていたことが窺える。琴、棋、書、画を四芸と称し、中国では古くから高士の嗜みとされ、日本に伝来し、貴族に嗜まれてた様子は『源氏物語』や『枕草子』にも見られる¹⁶。そのような所以で、貴族文化の系譜に自らを位置付けるために、武士である平清盛の娘たちは、四芸に加えて花結びを教養として身につけた可能性があるといえよう。

次に、平安時代の花結びの実態について考えてみたい。『源平盛衰記』と同じく平安時代に紫式部が著した『源氏物語』第47帖「総角」には「あげまきに長き契りを結びこめ同じ所に縫りもあはなむ」という薫から大君への贈歌が記され、総角結びに長く寄り添いたいという想いが込められていたことがわかる¹⁷。この内容を考慮すれば、江戸時代に『源氏物語』に言及して述べた花結びの意は、花の形をした結びではなく、総角結びを指していた可能性が高いと考えられる。そこで、今度は花結びという言葉にも注目してみたい。

平安時代以降、江戸時代に入るまで、花結びという言葉が記された史料は管見の限り、見当たらない。ではなぜ江戸時代に、花結びについて述べられるようになったのだろうか。その理由の一つとして、慶長（1596-1615）後半から元和（1615-1624）にかけて出版された「嵯峨本」の影響もあり江戸時代を通して見られた平安時代への懷古主義があったことが挙げられる¹⁸。事実、18世紀以降、女性の教養として、『源氏物語』、『伊勢物語』等の書物を知ることが、女子用往来物を通じて推奨されていった¹⁹。また、『墨海山筆』（叢書、成立年未詳）に収まる林龜瑞が著した「花結の記」（天保14;1843）にみるように、『源氏物語』の注釈書である『河海抄』と併せて、『源平盛衰記』にも言及がなされることもあった²⁰。この様に、平安時代への懷古主義という文脈のもと、平安時代の女性の教養とされた花結びの実践や花結びという言葉そのものが江戸時代に拡がっていったと考えられる。そして、その様相は絵画にも確認できる。鳥文斎栄之による浮世絵「風俗略六藝和哥」（寛政6;1794頃）には、総角結びあるいは几帳結びが、女性の横にある几帳の装飾に用いられている様子が描かれている。同作は、平安時代の様式、すなわち古典趣味の回帰を現した一例と目されている²¹。

他方、先にふれた女子用往来物は、江戸時代に流布した女性の振る舞いやあり方について記された書物の総称であるが、そこには、実際に花結びについての記述も見られた。『女礼十冊書弁解』は小笠原流礼法家の水島之也（ト也）（1608-1698; 慶長13- 元禄11）が著し、編纂した女礼集であるが、成立時期は未詳である²²。同人は、礼法家として積極的に活動した人

物であり、多くの活動実績の中でも注目されることの一つは、武士の奥方に仕える女中等のための礼儀作法、「女礼」を確立したことであり、それが後述の『女重宝記』類や女子用往来物などの啓蒙書に影響を与えたと考えられている²³。『女礼十冊書弁解』からは、江戸時代の礼儀作法がいかなるものであったかを窺い知ることができる。同書の中で、花結びに関連する記述が「産所の次第」にあり、次のように記されている。

おし桶の事。高さ八寸口の広さもおなじ。底はぬけるやうにまげさせ鶴亀松竹を白絵に書なり。是は難産の時は幾度も底を抜く事あり。また百日の間生子に湯をひく度毎に押をけに入たる打まきを湯殿へまき内をきよめ湯をひく也。又いづかたへ出るとも百日の内は打まきを散て出すなり。又うぶ屋にて鼻ひたる時ははな結をしておし桶にいれべし。鼻ひたるまじないにじゆ歌あり²⁴。(註：下線部表記は筆者によるもの)

その大意は、難産の子どもが容易に産まれることを願い、呪術のための桶「おし桶」に関するものである。産屋にてくしゃみをすることは魂が出る、不吉なこととされ、その様な状況においては、はな結を「おし桶」に入れるべきであるというものである。ここで花結びが用いられる理由は、花に鼻を掛け、魂を結びとめるという言葉遊びに起因したものである。つまり、産屋にてくしゃみをする人物がいれば、花結びを結ぶことで、その人物の魂を結び止めることができるという呪いが行われていたという²⁵。このように、元禄時代前後あたりの時代では、花結びは女性の出産の場で、呪いとして用いられていたことが窺え、花結びは、お産に関わる女性が身につけるべき心得であったと推察できる。

さらに、『女礼十冊書弁解』が影響を与えたと考えられる艸田寸木子^{くさだすんぼくし}が著した『女重宝記』(元禄 5;1692)には、江戸時代の年紀のある史料の中で最初に花結びに関する記述が確認できる。同書は、江戸中期に婦女子の啓蒙教化、実用日益を主として刊行された書物であり、読者層に関しては、明確な記載はないため、女性全般に向けて書かれたと考えられている²⁶。『女重宝記』には女性が身につけるに相応しい 18 種類の「芸」が次の様に述べられている。

て か 書く事、うた 歌よむ事、か かく 歌学する事、げん じ 源氏・い せ 物かたり・ひやくにん 百人一首・しゅ 古今・まんよう 万葉の義理を
しる事、たちぬい(裁縫)の事、うみつむぎ(績紡)の事、はた(機織)る事、え 絵か
き はな 花むすぶ事、こと 琴をたん(弾)ずる事、ばんしやう 盤上の事、かう 香をきく事、ちや 茶のゆ(湯)する事、れん
が 歌はいかい(俳諧)する事、りつくは 立花する事、わた 綿つ(摘)みやう(様)しる事、かみ 髪ゆ(結)
ひやう(様)しる事、をんな 女のしつけがた(腓方)をしる事²⁷(註：追記の漢字表記および下
線部表記は筆者によるもの)

18種類のうち5種類（裁縫、績紡、機織、花結び、綿摘み）が糸に関する内容であることから、糸を扱う能力が女性にとって望ましいこととされ、花結びもその範疇にあったと考えられる²⁸。事実、他の女子用往来物に注目すると、貝原益軒が著したとされる『女大学宝箱』（正徳4;1714）に組物師として女性が紐を組む様子が描かれるなど、養蚕、糸紡、機織、裁縫等において女性は深く関わっていた²⁹。さらに、少し時代が下ってからも『女今川益鏡』（天保12;1841）には、女の四芸として、書筆、裁縫、詠歌、弾琴が挙げられ、裁縫が女子の第一の勤めであることが記されている³⁰。『女重宝記』にみる18種類の芸について特筆すべきは、それらが、家計の補助につながる芸とそうでない芸に大別できることである。花結びは後者に該当すると考えられ、手芸の社会的機能に詳しい山崎明子の言葉を借りれば、花結びを高尚優美なる美的手芸と捉えることができると思われる³¹。

この様な高尚優美なる美的手芸としての花結びのあり様をより具体的にみることができるのが、藤牧陽潭（蔣泉堂）が著した女子用往来物の『女用文章初音錦』（万延元年;1860刊行）である³²。同書には、「和歌、色紙短冊歌書きやうの事、手習、歌貝、貝合、香道濫觴、活花、茶湯、双陸（すごろく）、花結、機織、縫針、衣服を裁ときの心得」の順で、それぞれに挿絵入りで説明がなされ、花結びについては、次の様に記されている（図2）。

はなむすび
花結

はなむすび
花結は女子のたはふれの手細工なり玉は糸は
な絹はな等にていろ／＼つくるかくなるすさ
みもむかしよりあることにて源氏物かたりにも
見へたりをんなはいとけなきよりものあら
／＼しきあそびさせずもの温順（原文ママ）
に生長（原文ママ）つれづれのみきりにはか
やうのやさしきわざを友としてなぐさみたま
ふべし³³



図2 「花結」、『女用文章初音錦』

この内容から、花結びは、糸や絹で作る手細工と称される女子の遊戯で、昔から伝わり、『源氏物語』にもみられると、江戸時代後期に認識されていたことがわかる。また、花結びの遊戯としての特質として、荒々しくなく、穏やかなもので、優しさがある旨が述べられる。江戸時代後期には、武家や商家などの裕福な女性が着物を裁った後の残り布を利用した、巾着、人形、玩具、小箱などの細工物や押絵と称される手芸を通じて、ものを大切にする心、美的感覚、手先の器用さを身につけていた³⁴。そのことを鑑みれば、花結びを楽しむことも、同様

の文脈に位置付けられ、今でいう情操教育的な意味があったと思われる。また、挿絵に注目すると、左の女性が五枚の花弁がある花結びを手にしているが、結び目の詳細はわからない。全体像からは、女性二人で造花を作り、枝に花や葉を糊で貼りつけているようにも見え、ここでの花結びは、造花としての花を指した可能性があるといえる。

それでは、女子用往来物にみる女子が身につけるべき教養という文脈以外で女性に花結びの伝承はなされたのだろうか。前述の『日本国語大辞典』に記載があるように、花結びは、被布などの入紐としても使われてきた。つまり、被布の装飾を通して花結びが伝承されてきた系譜もあるといえる。被布に関して、『日本風俗史事典』（1994）、『日本服飾史辞典』（1969）、『近世風俗事典』（1967）の記載内容をまとめると、被布の正確な起源は未詳で、享保時代（1716-1736）には茶人や俳人の男子が用いたもので、文政時代（1818-1831）には、町芸者などの女性が着用する様になり、明治時代には、子どもが被布を着用する様になったという³⁵。享保時代に男性が被布を着用していた史料をこれまで見つけられていないが、文政時代において被布を女性が着用していた様子は、残された史料から窺い知ることができる。文政年間（1818-1831）に刊行された『花容女職人鑑』は、蓬萊山人が、遊女など性的な意味を含む仕事を中心に女性の職業を歌川国貞の画と併せて著したものである³⁶。同書には、座敷で被布を着ている女性が描かれ、着物の上に羽織の被布の飾りや、留に花結びが用いられていた様子がみえ、当時、被布は室内で着用する上着であったことがわかる（図3）。花結びそのものに着目すると、総角結び、または几帳結びが結ばれているとわかり、明治時代以降の被布に多く見られる菊結びや梅結びの飾紐と異なる種類の結びが用いられている。このように、身装文化を通じても花結びは伝承され、時代が下るにつれ、被布は男性よりも女性の着るものとなり、結果的に被布を通じて花結びと接する機会も女性の方が多くなっていったと解することができる。



図3 「座敷で被布を着ている女性」、『花容女職人鑑』歌川国貞画

以上のように、主に江戸時代後期の女子用往来物の内容に関する考察から、花結びは平安時代の高貴な女性への憧憬という文脈で『源平盛衰記』や『源氏物語』に言及の上、その言説が築かれてきたことが明らかになったといえよう。さらに、花結びが、出産時のお呪いに用いられたこと、裕福な女性の手芸であったこと、女性用被布にも花結が装飾に用いられていたことから、花結びという言葉が、多様な意味を包含していたことも示されたと考える。

4. 男性が身につけた花結び

これまで女性と花結びの関わりについてみてきたが、花結びと男性との関わりはどのような

様相が見られたのであろうか。前述の『女重宝記』の後に出版された、その対となる『男重宝記』の内容からその実を確認したい。『男重宝記』（元禄6;1693）は、前述の『女重宝記』と同じ著者である艸田寸木子が著した男子の啓蒙書であり、その序文にて、「…童男の知て重宝とするものなり。大人男子のためにするにあらず…」とあることから、大人になる前の年齢層の男子を対象とした書物であることがわかる³⁷。『男重宝記』には、男子が身につけるに相応しい諸芸について記載されている。そこには、手習、詩、歌詠み、連歌、俳諧、茶の湯、立花、碁、将棋などが含まれている。一方、花結びに関して『男重宝記』には一切の記載がなく、男子が当時教養として身につけるべき芸事として認識されていなかったことがわかる。ただし、その事実をもって、男子が花結びと関わりがなかったと結論づけることは早計である。なぜなら、記録はないものの、例えば、元禄時代にも男子が志野袋を用いた点前を行っていた可能性があるためである。さらに、時代は下るが、後述の『古流結法図』（宝暦11;1761）や『三斎公御茶書』（天保6;1835）にみるように、茶道においても男性は花結びを享受し、記録に残らずとも、元禄時代に男性が茶道で花結びを用いた可能性があるためである。

他方、元禄時代以降、男性たちはどのように花結びと関わっていたのだろうか。花結びに関する図絵として残る史料は、茶道および香道に関して男性によって記録されたものが多くみられる。その背景として、茶道に関していえば、表立って、茶道が男性によって嗜まれたものであることとも関係すると考えられる³⁸。そのため、茶道において記録された花結びも、男性によって結ばれた可能性が高いといえる³⁹。その一例と考えられるのは『古流結法図』（宝暦11;1761）や『三斎公御茶書』（天保6;1835）であり、これらは異なる時代の巻物形式の写本であり、色彩が異なるが、奥書を除けば、類似した結び図の記録を有し、装飾的な結びが多く含まれている。その内容から、結び図は茶の師匠あるいは家元から弟子にのみ伝えられるべき秘儀として伝授されていたことが窺える⁴⁰。また、相伝に関与した人物名はいずれも男性であるため、これらの史料は、男性が花結びを嗜んでいた証左の一つといえよう。

それでは、『古流結法図』（宝暦11;1761）が写本として著された頃の識者は、花結びについてどのように理解していたのであろうか。香や茶に詳しい有職故実家の大枝流芳（生没年未詳）による随筆『雅遊漫録』全7巻（成立年未詳、宝暦5;1755序、宝暦13;1763刊行）は、文具、楽器、道具類、紐結、投壺、貝合等の遊戯等について述べる⁴¹。『雅遊漫録 六』では、27種の紐結を記すが、花結びとされているのは梅結びのみで、結び図に結び方と解き方が説明されている（図4）。花結びについては、序文で次のように述べている。

花結の事、女童の戯に似たりといへども、公家にも用ひ給ひ、神の装束武具に至るまで、各其結ありて、重宝を納め、飲食を餽るに、奴婢のたやすく開事不能の為となり。縄を

結てしるしとせし遺意なきにしもあらずや。香茶の雅人もこれを用ゆ。いとやんごとなき故ありとぞ⁴²。

その内容は、「花結びは女兒の遊戲に似ているが、公家も用いるもので、様々な結びがある。重宝を納めた物や食籠に縄を結ぶことで、結びが封印の印となり、それを運ぶ奴婢が簡単に開けることを防ぐためという。香道や茶道の雅人も結びを用いる。それゆえ、花結びにはそれなりの謂れがある」と解せる。つまり、簡単に解けないため、花結びには鍵の様な役割があったと述べている。事実、茶道石州流の秘伝書『和泉草』（貞享 4;1687）に「小壺袋ニ入レ封付ケル事アリ。御成ノ時茶道役ノ知ル事也」,「茶入袋緒ノ結様色々有、難筆蹟。功者ノ結タル可見覚」とあり、将軍に仕えた茶道役は、小壺（茶入）を袋に入れ、その上に封じ結びをしたこと、色々な結びがあったことが窺え⁴³、大枝流芳の茶道の知識が、その内容に反映されていたと思われる。

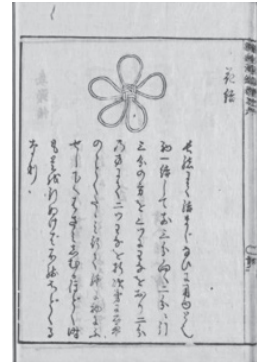


図4 『雅遊漫録 六』花結

他方、香道において、どのような花結びが伝承されたのだろうか。香道は、男性のみならず、女性も嗜んだ芸能であったことから、男女ともに花結びを結んだ可能性が高いが⁴⁴、茶書と同様に男性によってその伝書が記されてきた。筆者が閲覧した中で、江戸時代に著された香道伝書の中で最多の彩色された花結びが見られるのは、『香道調度図』（明和 8;1771）（写本）であり、著者は男性で、諸流の秘説や奥義を追い求めていたことが記されている⁴⁵。同書は、彩色のある道具図と結図を中心に、説明文と併せて構成され、「紐類結形」として彩色された紐結び 20 種類の図絵が記載されている⁴⁶。記された結図はいずれも完成形で、結び方に関する説明はないため、その詳細は、師から弟子に口伝で伝承されたと推察できる。

では、さらに時代が下ると、花結びは茶道においてどの様に伝承されたのだろうか。管見の限り、花結びが見られる茶の伝書は、煎茶に関連した版本『玉のあそび』（寛政 13;1801 序, 享和 2;1802 刊行）以外に見当たらない。同書には、煎茶道具を入れる為と思われる袋に結ばれた花結びを含む約 60 種類の結びが記されている。それは、茶道そのものにおける花結びの伝承が、19 世紀を境に衰退していった可能性が高いことや、抹茶道から江戸後半から明治に盛んになった煎茶道に移行したこととも関連があると思われる⁴⁷。この様に版本を通じて花結びの知識が拡がったと考えられ、それは、17 世紀後半以降に達成された高い識字率により、出版物が女性を含む幅広い読者層に流通していったことによるとと思われる⁴⁸。

以上のことから、女子用往来物にみる女性が身につけるに相応しい芸としての花結びに関する記述内容とは対照的に、男性が身につけるに相応しい芸として、花結びが記されてきた

書物は、見られなかったことが明らかになった。一方で、茶や香の伝書にみる記載内容からは、花結びが秘儀という概念と相まって男性に享受されたため、女性との比較でいえば、限定的な人数の男性が花結びを身につけてた可能性が高かったことが示されたといえよう。

おわりに

本稿は、ジェンダーの視点を踏まえて、主に江戸時代にみる花結びの伝承について論じた。まず女性に目を向けると、江戸時代の人々が抱いた平安時代の王朝文化への憧憬の念も手伝い、『源平盛衰記』や『源氏物語』を典拠に、花結びは平安時代の高貴な女性が教養として身につけていたというイメージが形成され、そのイメージが江戸時代の女性が理想の女性像を学ぶ際に用いた女子用往来物を通じて女性に受容されていた様相を示した。また、女子用往来物には、出産の際に花結びをお呪いとして用いたこと、手芸として花結びを享受したこと、花結びが女性用被布の装飾に使われたことも記され、女性が伝承した花結びに包含された意味が多元的であり、額田や藤原の先行研究みる、装飾的な結びという意を超えて花結びという語が使われていたことが明らかになった。一方、花結びの伝承において男性が果たした役割も考察し、茶道や香道を通じて、装飾的な意味を包有する花結びを伝承していたことも示した。そこで特徴的なのは、両芸能で花結びに関して残された写本史料は、秘儀として伝えられた内容であり、女子用往来物の様に大衆を対象とした書物ではなかったことである。つまり、女性は公にされた花結びの知識を得ていたのに対して、男性が伝承した花結びは秘された性格を有したため、男性も花結びの伝承者であったことが見えづらくなっていたと指摘できる。それは、18世紀半ばまで茶道の様な上層階級の芸能は男性を中心に行われ、18世紀後半以降には諸芸道で家元制度が制度化され、知識の伝達が家としての権威を保つことに直結したことに関係していたと思われる⁴⁹。以上のことから、男女が異なった社会的規範や役割をもって生活していたことに呼応し、それぞれに異なった花結びが伝承され、そこに包含される意味が醸成されてきた様相の一端が明らかになったと考える。

註

- 1 谷村玲子は、明治以降の研究では、日本という全体的な視点から「日本女性イメージ」に問題を発展させて論じることが可能であり、近代からの研究が進む一方で、江戸時代の女性の諸芸に関する研究は数が少なく、限定されたテーマに限られ、活発な研究状況とは言い難いと指摘する（谷村玲子「小特集『日本意識と女性性』：江戸時代の女性の稽古事からみた日本意識の形成」『国際日本学13』法政大学国際日本学研究所（2015）、pp.151-179（pp.151-152））。
- 2 『日本国語大辞典 第二版 第十巻』小学館（2001）p.1312.
- 3 田中年子『くらしを楽しむ四季の花結び』淡交社（2005）。

- 田中年子『花むすび』京都書院（1993）。
- 田中年子『花結びと袋もの』日本放送出版協会（2004）。
- 永井百合子『花結び：美しい紐あそび』淡交社（1997）。
- 4 伊勢貞丈『貞丈雑記 四巻 東洋文庫 453』平凡社（1986），p.223.
 - 5 額田巖『結び・ものと人間の文化史 6』法政大学出版局（1974），p.48, p.99, p.111.
 - 6 藤原覚一『図説日本の結び』築地書館（1974），pp.146-173.
 - 7 同上，p.14.
 - 8 おほつき四郎『伝承・花結び』総合科学出版（1981）。
 - 9 「包記」では陰陽道に関する包み方の原理原則や由来を解説し、「結記」では図絵を用いた技法の紹介に力点を置いて説明する。「包記」は年紀から、伊勢貞丈（享保2-天明4年;1717-1784年）が宝暦14（1764）年に記した書とわかる。「結記」の前半部分は、宝暦9（1759）に記され、そこに追記をへて「結記」が完成したが、完成年の年紀はない。その後、「包記」と「結記」を併せた『包結記』を天保11（1840）に『包結図説』と改題して上下二巻の白黒印刷の板本として出版された。（荒木真喜雄『復刻伊勢貞丈「包結記」I 翻刻・現代語訳集』淡交社（2007））。
 - 10 伊勢貞丈『貞丈雑記 一巻 東洋文庫 444』平凡社（1985），p.iv.
 - 11 荒木真喜雄前掲書，p.76.『包結図説』（天保11;1840刊行）東北大学附属図書館狩野文庫蔵，
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100368950/1?ln=ja> [2023年8月1日]。
 - 12 荒木真喜雄前掲書，p.117.『包結図説』（天保11;1840刊行）東北大学附属図書館狩野文庫蔵。
 - 13 荒木真喜雄前掲書，p.137.『包結図説』（天保11;1840刊行）東北大学附属図書館狩野文庫蔵。
 - 14 『源平盛衰記 二』国立公文書館内閣文庫蔵，
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100011898/viewer/37> [2022年12月7日]。
花結びが平安時代の上流階級の女性が身につける教養であったとして、江戸時代以降、『源平盛衰記』を典拠に花結びの系譜を述べられるが、その成立時期は明らかではなく、史実としての信憑性が議論の対象になることがあると研究者が指摘することは留意すべきである（松尾葦江『源平盛衰記年表』三弥井書店（2015），pp.4-5，岡田美津子『源平盛衰記の基礎的研究』和泉書院（2005），p.1，曾我良成『「源平盛衰記」の史実性——殿下乗合事件の平重盛像再考——』松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』笹間書院（2015），pp.560-571）。
 - 15 『源平盛衰記 三十九』国立公文書館内閣文庫蔵。
 - 16 陶智子『江戸の女性：躰・結婚・食事・占い』新典社（1998），p.20.
 - 17 『源氏物語 第8巻 付現代語訳』玉上琢弥訳注，角川書店（1989），p.171, p.401.
 - 18 『ミネアポリス美術館浮世絵名品集成』ミネアポリス美術館編，藝華書院（2011），p.142.
『王朝文化への憧れ：雅の系譜』相国寺承天閣美術館（2022）。
『伊勢物語：絵になる男の一代記』香雪美術館，中之島香雪美術館編，中之島香雪美術館（2022）。
 - 19 『江戸時代女性生活絵図大事典 第四巻』大空社（1993），pp.26-31.
 - 20 林亀瑞「花結の記」（天保14;1843）『墨海山筆』内閣文庫国立公文書館蔵。
 - 21 『ミネアポリス美術館浮世絵名品集成』ミネアポリス美術館編，藝華書院（2011），p.142.
源氏物語絵巻では人物を描かず，几帳を描くことで，貴女が存在が暗示されることが多かった（岩坪健『源氏物語の享受：注釈・梗概・絵画・華道』和泉書院（2013），pp.500-510）。それゆえ，几帳から，源氏物語絵巻や『源氏物語』を想起した者もいたと思われる。
 - 22 陶智子『「女礼十冊書弁解」全注』和泉書院（1998），pp.267-271.
 - 23 同上，p.270.

- 24 同上, pp.242-243.
- 25 同上, pp.242-243.
- 26 Moretti, Laura, *Pleasure in profit: popular prose in seventeenth-century Japan*, Columbia University Press (2020), p.29.
- 27 苗村丈伯『女重宝記・男重宝記：元禄若者心得集』長友千代治註, 社会思想社 (1993), pp.21-22.
『女重宝記』元禄 5, 国会図書館蔵,
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2533891> [2023 年 1 月 7 日].
- 28 谷村玲子前掲論文 pp.151-179 (pp.153-154).
- 29 Guth, Christine, *Craft Culture in Early Modern Japan Materials, Makers, and Mastery*, University of California Press (2021), pp.70-75.
- 30 『女今川益鏡』(天保 12;1841), ポーラ文化研究所蔵, <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100314419/8?ln=ja> [2023 年 7 月 31 日].
- 31 山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房 (2005), pp.68-69.
- 32 陶智子前掲書 (1998), p.36.
- 33 藤牧喝潭『女用文章初音錦』万延元年 (1860), 小泉吉永寄贈データ資料, 国文学研究資料館蔵,
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100289572/8?ln=ja> [2023 年 6 月 22 日].
- 34 『江戸・明治のちりめん細工：伝承の裁縫お細工物：日本玩具博物館所蔵』雄鶏社 (2009).
江戸後期には、『花結錦絵合』(元文 4;1739)や『絹針細工押絵早稽古』(文政 8;1825)が押絵の作り方の解説本, 現在でいう手芸書として刊行されていた(『遊びをせんとや』京都府立大学文学部日本・中国文学科, 京都府立京都学・歴史館編, 京都新聞出版センター (2018), p.86).
『ちりめん細工の今昔』たばこと塩の博物館・日本玩具博物館 (2018), pp.2-6.
- 35 『日本風俗史事典』日本風俗史学会編, 弘文堂 (1994), p.545.
『近世風俗事典』江馬務, 西岡虎之助, 浜田義一郎監, 人物往来社 (1967), p.50.
『日本服飾史辞典』河鱈実英編, 東京堂出版 (1969), pp.229-232.
- 36 蓬萊山人『花容女職人鑑』歌川国貞画, 国立国会図書館蔵,
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2533674/1/20> [2023 年 6 月 12 日].
- 37 苗村丈伯前掲書, p.198.
- 38 熊倉功夫は、『江岑宗左茶書』に記された利休の妻, 宗恩が果たした役割に見る様に, 茶会等を催す際, 裏方である女性の助けが必要であったことは明らかだが, 女性が茶会記等に記されることは稀であったという。また, 18 世紀以降女性が茶会に参加した記録が増え, 女性用の茶道指南書を求める声が高まり, それに応じて大枝流芳が『刀自袂』を著したと説明する(熊倉功夫『大口樵翁：女性茶の湯のすすめ：二百五十年忌記念出版』宮帯出版社 (2013), pp.12-15)。
- 39 熊倉功夫は, 茶の湯には, 女性も当然関わってきたものの, 茶会等に表立って女性が登場することは稀であり, 元禄 5 (1692) に出版された『女重宝記』に茶の湯の項はなく, 元禄 6 (1693) に出版された『男重宝記』に茶の湯の項があると指摘する(熊倉功夫前掲書, p.14).
クリステン・スーラックは, 生活教養書として読まれた『女重宝記』と『男重宝記』の茶道に関する記述は対照的で, 後者には習得すべき作法として詳細な説明が付されるが, 前者には嗜んでいい芸能の一項目としての言及に留まると指摘する(クリステン・スーラック『MTMJ 日本らしさと茶道 茶道建国』廣田吉崇監訳, 井上治・黒河星子訳, さいはて社 (2018), pp.90-91).
江戸時代前期の元禄期の生活を図解した風俗事典である『人倫訓蒙図彙』(元禄 3;1690)には,

- 茶湯者という芸能者を男性が担っていたことが掲載された図絵からわかる（『人倫訓蒙図彙』（1690）国立国会図書館蔵，<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592440> [2023 年 1 月 7 日]）。
- 40 『古流結法図』写本（宝暦 11;1761）西尾市岩瀬文庫蔵。
『三斎公御茶書』写本（天保 6;1835）野村美術館蔵。
- 41 『雅遊漫録』の著者大枝流芳（出生年不詳，寛延 2-4;1749-1751 頃没）は，享保頃に活躍した。大口含翠に師事し，多くの香道伝書を残した香道家および投壺，貝合等の遊戯や煎茶，花道等の故実の継承に貢献した故実研究家である。結びに関しては，『雅遊漫録』および『白露結書』を著した（翠川文子「大枝流芳（岩田信安）小考」『川村学園女子大学研究紀要第 15 巻第 2 号』（2004）pp.24-25）。
- 42 大枝流芳『雅遊漫録 六』初版（宝暦 13;1763），国立公文書館蔵，
<https://www.digital.archives.go.jp/file/1232211.html> [2023 年 1 月 12 日]。
大枝流芳「雅遊漫録」『日本随筆大成〈第二期〉23』吉川弘文館（1974），p.349。
- 43 本庄宗泉『石州宝典和泉草』浪速社（1965）[藤林宗源『和泉草』（貞享 4;1687）]，pp.126-127。
東京国立博物館デジタルライブラリー所蔵の『和泉草 三四五』（写本）には，「小壺袋二入封シ付ル事有り御成ノ時茶道役ノ知事之」とあり，その内容は，本庄宗泉『石州宝典和泉草』（1965）と同義である（藤林宗源『和泉草 三四五』（写本）東京国立博物館デジタルライブラリー，<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/2912> [2023 年 1 月 12 日]）。
- 44 江戸前期より『女重宝記』等の刊行本では，女性の芸能として香が記され，聞香を女性が嗜んでいたことが窺える（谷村玲子前掲論文，pp.151-179（p.162））。
苗村丈伯前掲書，pp.133-141。
『女文章稽古』（寛保 2;1742），『女忠教操文庫』（享和元年 ;1801），『女有職学文庫』（慶應 2;1866）等の女子往来本にみる香について記されている内容からも，女性が香を嗜んでいたことがわかる（『江戸時代女性生活絵図大事典第四巻』大空社（1993），pp.268-288）。
香嗅という芸能者を男性が担っていたことが，『人倫訓蒙図彙』掲載の図絵からわかる（『人倫訓蒙図彙』初版（1690）国立国会図書館蔵，<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592440> [2023 年 1 月 7 日]）。
- 45 林花堂『香道調度図』写本（明和 8;1771）竹幽文庫蔵。矢野環，福田智子「竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介」『社会科学第 46 巻 2 号』同志社大学（2016），p.17。
- 46 林花堂前掲書。
- 47 雄川丘甫『玉のあそび』（享和 2;1802）奈良女子大学学術情報センター蔵，
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100239156/viewer/17> [2023 年 1 月 7 日]。
- 48 Moretti, *op.cit.*, pp.25-30。
- 49 池上英子『美と礼節の絆：日本における交際文化の政治的起源』NTT 出版（2005），p.206，pp.218-224。

【図版出典】

- 図 1：山田松香木店京都本店にて筆者撮影。
- 図 2：大枝流芳『雅遊漫録 六』初版（1763），国立公文書館蔵。
- 図 3：蓬萊山人『花容女職人鑑』歌川国貞画，国立国会図書館蔵。
- 図 4：藤牧暁潭『女用文章初音錦』万延元年（1860），小泉吉永寄贈データ資料，国文学研究資料館。

The Cultural Transmission of Hanamusubi During the Edo Period from the Gender Perspective

YAJIMA, Yoshika

Hanamusubi [花結び] are ornamental silk knots shaped like flowers or insects and meant to be attached to small bags, and considered as part of Japanese traditional culture. Historical documents indicate that these knots were typically used in both tea and incense practices during the Edo period (1603–1868). While *hanamusubi* continue to be employed in incense practices today, the use of *hanamusubi* in the tea ceremony ended during the nineteenth century. In addition, since the late Edo period, *hanamusubi* have been incorporated into women's fashion in Japan, particularly as buttons for kimono coats. Scholars of Japanese art and design have examined a range of material culture related to tea and incense practices, but *hanamusubi* have not been considered in this research. Therefore, this study focuses on the gender perspective, which is often overlooked in traditional craft history research, and aims to clarify how the culture of *hanamusubi* was fostered and handed down during the Edo period.

The investigation revealed that *joshiyō ōraimono* [女子用往来物], books used by women in the Edo period to learn about the ideal woman, were one of the factors that promoted the discourse of *hanamusubi*, which records that *hanamusubi* was employed to present the image of sophisticated women and craft, and used to wish women a safe delivery. In contrast, men acquired knowledge of *hanamusubi* through secret rituals and passed on their culture through tea and incense practices. These different trajectories of the cultural diffusion of *hanamusubi* between women and men demonstrates the myriad meanings that are embedded or hidden in the material culture of *hanamusubi*.

Acknowledgement:

This research was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP 21J10013.

I would like to thank Dr. Shigeki IWAI, professor of Osaka University, Dr. Isao KUMAKURA, director of MIHO MUSEUM, and Dr. Keisuke TAKAYASU, professor of Osaka University for their invaluable comments and encouragement on this work during the revision stage.